

第一回 いまこそ品詞に注目しましょう

河合塾漢文科講師 藤川 左近



皆様はじめまして。北海道で予備校講師をしております藤川と申します。ちよつとした漢文法の知見は、漢文読解を正確に、授業を豊かにいたします。このたび「つれづれ」編集部から、その漢文法について簡単な記事を書いてほしいとの御依頼を頂戴いたしました。不肖ながら数回にわたり御案内もうしあげる次第です。「虎の巻」ほど大したことも書けませんので、「猫の巻」です。よろしく願います。

1. 漢文はこつそり品詞が変わる

そもそも日本語には日本語の品詞があるように、英語には英語の品詞があるように、やはり漢文には漢文の品詞があります。よく考えれば当たり前の話なのですが、国語科の教員養成課程でもこのあたりは詳しく教授されることがないようで、あるいは御存じでない先生方もいらっしゃるのではないのでしょうか。かくいう私も大学在学中に体系的に習った経験がなく、結局独学で漢文法を学んだのですが、そこで痛感したのは、漢文の品詞概念が日本語とも英語とも

異なる極めて特殊なもので、しかもその理解なしには漢文を正確に解釈できないということです。

その特殊性の最たるものは、漢文の品詞はまったく静的でなく、常にころころ変わってしまふということ。例えば「王」といった、誰しも名詞だと思ふような語であっても、漢文では動詞になったり副詞になったりするわけです。試みに教科書掲載題材の「項王自刎」（史記・項羽本紀）で「王」字を拾い出してみると、

当然ながらほとんどが項羽や王翳（ちやうい）に関連するよ
うな文字通り名詞の「王」であるわけです。し
かしそれでもよく見ると

縦（たど）江東父兄憐而王（トストモ）我、

という表現の「王」は「王とす」と読ませています。漢文法では動詞扱いです。ほかに

例2) 江東雖小地方千里衆
数十万人亦足王也。

という表現があつて、ここの「王」は「王たり」と断定助動詞「たり」を送つて訓読してい

ます。漢文法的にはこの「王」も動詞です。

この変化、漢字の外形が変わっていないことに注意が必要です。日本語や英語の単語ならば語尾を見て品詞をある程度推測できますが、漢字ではそれができないのです。「王」が「王」の形のまま、いつの間にか名詞から動詞に化けていたりするのです。

2. 品詞は大事な考え方です

こういう話をしてしまうと「やはり高校漢文で品詞を教えるのは難しすぎるんじゃないか」とお思いになるかもしれません。しかし私はそれでも品詞を教えるべきだと考えます。

第一に、やはり漢文には品詞という概念が厳然として存在するからです。漢文は日本語表記の一形態としても使われていた経緯こそありますが、漢文のルーツは古代漢語であり外国語であつて、当然日本語とは本質の違う文法によつて成立しています。そうである以上、日本語と違う品詞が存在していると考えて学習するのは、外国語学習の基本とも言える態度なのではない

でしょうか。

まして我々漢文指導者も品詞を想定しながら漢文を解釈しているはずで。例えば「兵以詐立、以利動」（孫子）という表現を見たら、まずは訓読よりも先に「兵は名詞で主語、立と動は述語動詞、以は前置詞」と考えるでしょう。よほど漢文に習熟するのでなければ、最初から書き下しがり浮かびはしないものです。

第二に、正確な訓読のためには品詞理解が不可欠だからです。訓読は漢文の品詞・成分を理解し、意味を捉え、そのうえで読みを整えていくものです。漢文と日本語の品詞は必ずしも一致しませんが、それは訓読との関連性を否定するものではありません。例えば「以」字には大きく分けて、上から「：で以て」と読む場合と下から「…を以て」と返読する場合と二種類の読み方がありますが、これは前者が接続詞用法と、後者が前置詞用法と密接に関連します。品詞と訓とは表裏一体なのです。

つまり「兵以詐立、以利動」の一文を見て「兵は詐を以て立ち、利を以て動く」と読むまでは、品詞を元にした文法構造把握と、品詞の違いによる読み分けとを行っているのです。この作業を言葉で説明しようとするならば、品詞の概念は必要不可欠です。

さらに重要なのが第三の点です。漢文の品詞の変化には一定の法則が存在し、無原則に変わっているわけではありません。「王」がアプリ

オりに「王・王とす・王たり」の三通りの読み方を持つているのではなく、そもそも名詞にある条件を整えば「〜とす」、ある条件を整えば「〜たり」と読む、ということなのです。どのように原理原則を考え生徒に教えるからこそ、名詞が「王」でなく例えば「器」や「人」になつても、生徒は「器とす」「人たり」という訓を引き出せるようになるのです。こうした「文法的な知恵」こそが高校漢文にも必要だと私は思うのです。

3. 品詞は語順で決まる

ところで中国や台湾の学生も漢文法を学びます。現代漢語では、こうした品詞の変化のことを「詞類活用」と言うそうです。「詞類」とは品詞のこと。ということは（単なる偶然の一致なのかもしれないが）、日本語が語尾をさまざまに「活用」させるように、漢文では品詞を「活用」させていると考えられませんか。日本語で「学ぶ」に助動詞「ず」を接続すると「学ばず」と活用するように、漢文でも「王」に続けて例えば指示代詞「之」を置いて「王之」とすれば「王」を動詞に活用できるのです。

これを逆手に取ると、着目した語の前後にどんな語があるか、つまり語順をよく見ることで、活用が起きているかどうかを確認できることになりそうです。実はこれこそ漢文の文法読解の基本なのです。具体的に見てみましょう。

教科書の例1「王とす」は原文をよく見ると

「王我」で、直後に人称代詞「我」がありました。先ほどの「王之」もそうなのですが、漢文では名詞を始め多くの品詞で「直後に目的語を取る場合は他動詞に活用する」というルールがあり、特に地位官職の名（王）「将」「相」など）が人を目的語に取ると「その人を地位官職に就ける」の意となります。ですから「王我」はまず「我を王とす」という訓を考えねばなりません。また例2「王たり」だと、直前に「足」があつて「足王」となっています。「足」

には助動詞用法がありますから、「助動詞の後には動詞」というルールを知っていれば「王」が動詞に活用している可能性を疑うことができず。もし「足王」が「動詞+目的語」なら「王に足る」、「助動詞+動詞」なら「王たるに足る」などとなりますから、あとは文脈判断です。このように品詞の活用は無原則に行われているわけではありません。もちろん最終的には文意と文脈との整合性を見て判断することになりますが、あくまでそれは「文法的理解によつて絞込まれた選択肢の中から、文脈にふさわしいものを選ぶ」という手順です。文脈把握が解釈に不可欠だからといって、品詞を主体とした文法的理解を無視してよいことにはならないのです。

次号はこの活用ルールの代表的なもの一つ「使動用法」について、もう少し詳しく説明いたしますししょう。